



募金へのご協力ありがとうございます

今年度も児童会が取り組んでいるユニセフ活動が行われています。今年は、能登半島地震のための募金活動となっており、ユニセフは、「あらゆる自然災害で、最も困難な状況に置かれてしまうのは子どもたち」と、世界各地で子どもたちのために活動を続けています。



日本人にとって「寄付活動に参加する」という行為は、寄付文化が根付いている欧米に比べるとあまり身近に感じられないと言われてきましたが、東日本大震災が大きな転機となって、日本各地から多くの義援金や支援金が集まりました。それを契機に、寄付文化が少しずつ根付いてきたと言われています。また、寄付を行っている人に、その理由について内閣府が行った調査では、「社会の役に立ちたいと思ったから」という回答が最も多く、社会貢献のために寄付をしている人が多いことがうかがえます。この寄付活動は、帯西が子供たちに付けたい力として目指している「自己有用感」が根底にあると思っています。

ただ、寄付は強制ではありません。いま寄付を行うことによって、「被災された人々がどういう課題を抱えているのか」、「募金活動を行う団体がどのような活動で人々を支援しているのか」などの情報を自分の目や耳で知ることが、寄付の第一歩だと思っています。今自分にできることを考え、行動することが大切なのです。

●ひこうきぐも✈ vol.25

もう一人の天才とは、「パブロ・ピカソ(本名:パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウロ・ホアン・ネポムセーノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・シブリアノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダット)」です。ピカソ…この人は20世紀の巨匠といわれますが、一体なぜ彼は偉大なのでしょうか。ピカソは幼い頃から、大人が描くような絵を描いていたそうです。そして画家であった彼の父親は、息子の絵のあまりのうまさに、自ら画家であることを辞めてしまったといえます。一方ピカソ自身は、大人のように絵が描けることが悩みの種だったようです。「ほんの小さな頃から、子供らしい絵を描いたことが無いんだ。」とピカソは言っています。その反動からか、ピカソは独創的に、パッと物事の本質をつかみ、自由な色彩を施し、子供のようにどこまでも自由であることを求めました。



私自身、ピカソの絵に対して、あまり魅力を感じていませんでした。しかし、土産話の一つにでもなると思い、マドリッドの国立ソフィア王妃美術センターに「ゲルニカ」を観に行きました。しかし、初めてその絵を観た瞬間から、私はすっかり魅了されてしまいました。ゲルニカが制作された背景には次のような理由があります。1937年4月26日、フランコ軍を支援するドイツ軍は、スペイン北部の町ゲルニカを爆撃しました。この爆撃によって多くの市民の命が失われたのです。ピカソは故国スペインのためにこの大作(349.3×776.6cm)をほぼ1ヶ月で描いたのです。燃える家、死んだ子を抱えて絶叫する母親、スペインの国技である闘牛、デフォルメされた人間や動物が、キャンバスを埋め尽くしています。この作品は世界中から大反響を呼びました。フランコ政権は、ゲルニカは国宝であると主張し、返還を求めますが、ピカソは「真の民主主義が樹立しない限り作品は戻さない。」と拒否したのです。しかし、このゲルニカもピカソの生誕100年目に当たる1981年にスペインに帰郷を果たしたのです。このことは、長い内戦を経たスペインの人々の和解が、真に確認されたことの証でもあるのです。自由人である画家ピカソにとっての真の自由とは、「描く」という闘いを続けることの中で、獲得できるものだったのではないのでしょうか。

※「ひこうきぐも」は、あくまでも荒木が旅をした当時、約30年前の街の様子です。現在とは状況に違いがあることをご了承ください。バックナンバーは昨年度からの累積です。